

新大学チャペルに思う



院長 寺園 喜基

新しい大学チャペルが昨年4月にオープンしました。音響や光彩にも気配りされた立派なチャペルで、学内外の皆さんに喜ばれています。ここで語られる言葉や演奏などを通して、さらに多くの人々に喜びが与えられるようにと期待いたします。

「チャペル」という言葉は、独立した教会や教会本堂とは区別されて、附属礼拝堂を指しています。教会に付属した小礼拝堂とか、大学、病院、墓地などの施設に附属的に設けられた礼拝堂です。

また、「チャペル」はそこで行われる礼拝行為のことも指しています。しかし、この礼拝行為は教会での礼拝、公同の礼拝と同じなのか、あるいは違うのか、という点で呼び方が違ってきます。大学での「チャペル」を、前者の理解に基づいて、礼拝、学校礼拝、大学礼拝と呼んでいる学校もありますし、あるいは後者の理解に基づいて、チャペル、チャペル・アワー、チャペル・サーヴィス、カレッジ・アワーと呼んでいる学校もあります。

この呼称の違いは内容の違いにも対応しています。前者において話されるのは説教、奨励であり、後者においては講話、チャペル・トーク、前者において用いられるのは聖書であり、後者においては人生訓、前者における話し手は牧師、キリスト者の教師であり、後者においてはキリスト者とは限らない有名人、役職をもった教師です。

そしてまた、このような理解の相違は、基本的には「キリスト教的学校」をどのように理解するか、とも関係していると思います。それは、第一にキリスト教、信仰から出発して、このキリスト教の持つて

いる文化的側面、特に教育という側面への働きかけを重視し、そこから学校設置を具体化する、という理解です。かつて宣教師によって創設され、ミッション・スクールと呼ばれていたキリスト教学校はこのような成立過程をたどりました。もう一つは、学校や教育を先に考えて、これにキリスト教的要素を付加していく、あるいは教育という一般的な概念に、キリスト教的教育という独自性を盛り込んでいく、という理解です。創設初期の時代からおよそ一世紀を迎えようとし、また教育機関としても大きく発展した多くの学校は、ミッション・スクールという性格からキリスト教学校へと性格が変化してきましたので、一般の学校の枠の中で、教育にキリスト教的要素を取り入れる、という方向が現在多く取られていると思われます。

少し図式化して述べましたが、西南学院はどの分類に入るのでしょうか。現実的なあり方から取って言うなら、両方のミックスだと思えます。確かに一般学校の枠の中でチャペルは「教育的」礼拝として行われ、人生訓的なトークや音楽演奏も行われています。しかし、多くの場合、祈りに始まり祈りで終わる「礼拝」として守られてもいます。

キリスト教学校が教会と世界の間にある限り、チャペルが教會的要素に重点を置いたり、教育的要素に重点を置いたりするのは当然だと思えます。司会者、話し手、主題によって、幅をもった在り方をしているのは、首肯すべきことだと思います。したがって、チャペルは宗教行事か教育行事か、と問うなら、それにも、「あれも・これも」と答えざるを得ません。性急な「あれか・これか」は、チャペルの在り方を狭めることになると思います。どのような在り方にせよ、大切なことは、学校にチャペルがあるということです。何故なら、それによって、学問的真理は相対的であり、教育・研究は超越的真理に開かれていなくてはならない、ということが事実に表現されるからです。